

当院における10年間の精液検査所見変化

Comparison of semen parameters in ten years

堀内 理菜¹・杉原 研吾¹・園田 桃代¹

中岡 義晴¹・福田 愛作¹・森本 義晴²

Rina HORIUCHI¹, Kengo SUGIHARA¹, Momoyo SONODA¹

Yoshiharu NAKAOKA¹, Aisaku FUKUDA¹ and Yoshiharu MORIMOTO²

¹IVF 大阪クリニック, ²IVF なんばクリニック

¹IVF OSAKA Clinic, ²IVF NAMBA Clinic

[目的]

現在では不妊原因の約半数が男性因子とされている。さらなる精子数の減少、精子運動率の低下、また Sexless の増加などが報告されている。当クリニックは本年に開設 10 年を迎えるが、その間すべての患者の配偶者の精液検査を必須項目とし実施してきた。10 年前と比較し ART の実施件数は増加の一途をたどっている。その間の精液検査所見の変化を様々な観点から検討した。

[方法]

1997 年から 2007 年までに実施した精液検査 13565 件を分析の対象とした。その中でそれぞれ年度別の①乏精子症、②精子無力症、③奇形精子症、④無精子症、⑤膿精子症、⑥精液過少症、⑦精子死滅症の割合を比較検討した。当院では WHO の基準値は ART 臨床にそぐわないと考え当クリニック独自の基準値を設けている。各基準値はそれぞれ①総精子濃度 $75 \times 10^6/\text{ml}$ 未満、②運動率 50% 未満、③奇形率 35% 以上、④精液中に精子が確認できないもの、⑤WBC が $10 \times 10^5/\text{ml}$ 以上のもの、⑥精液量が 2.0ml 未満、⑦運動精子が確認できないものとした。精液一般検査は精液量と pH を測定後に Makler Chamber を使用し、運動精子、不動精子、奇形精子、白血球を目視でカウントした。カウントは採精時間から 30 分以上経過し液化を確認後に行った。

[結果]

1997 年と 2007 年における各項目の比較では、乏精子症は 44.8% (461/1029) から 53.3% (367/688) に、精子無力症は 34.8% (358/1029) から 38.1% (262/688) に、また奇形精子症も 6.4% (66/1029) から 33.3% (229/688) にとすべての項目において増加していた。一方、膿精子症は 35.9% (268/1029) から 17.7% (145/688) に減少していた。その他無精子症、精液過少症、精子死滅症の割合には大きな変化は認められなかった。正常精液所見を呈する男性の割合は多い年度でも 21.8% にとどまった。

[考察]

今回の検討よりこの 10 年間における当院受診女性配偶者の精子濃度、精子運動率の低下および奇形精子症の増加と膿精子症の減少が明らかとなった。精子パラメーターの低下の原因として晩婚化や環境ホルモンなどが挙げられているが、関連は未だはっきりしていない。いずれにしても治療可能な精液異常所見の増加が明らかとなっているので、不妊が疑われた場合、できる限り早期の精液検査を行い、ひとたび異常が発見されれば積極的に ART 治療をおこなっていくことが肝要であると考えている。

異常別(症)	乏精子	精子無力	奇形精子	無精子	膿精子	精液過少	精子死滅	全件数
1997 年	44.8%	34.8%	6.4%	1.4%	35.9%	26.0%	1.5%	1029
2007 年	53.3%	38.1%	33.3%	1.7%	17.7%	21.1%	0.3%	688